316

仙崖和尚捨小舟

特55
316

文政丁酉二月二十日 於仙臺沐浴西亞書
佛在給孤獨園
摩訶迦葉
垂髮

衣而
末世
尊遥見
歎曰善哉迦
葉豫分半座
命令就來迦葉退路曰余是
如來末門弟子願令分座并敢兼旨
大衆愈驚 是吾教外別傳達磨西來
二祖拜立目擊道之樣子也且道是何道理

[illegible]

朝倉の秋

朝倉の昔思へば秋の田の黄金拾ふ神ぞ今[illegible]

都方樹

[illegible]れ下り西の[illegible]れば薬師寺の大相の塔

清井の秋

秋風に清井の花葉陰の[illegible]て[illegible]志[illegible]山の[illegible]

[illegible]田山の[illegible]拾い

[illegible]

朝顔の花

[illegible]田山[illegible]

咲る日ハまもなくとて雪人食と咲う行き新の花

雪

世の中となく嵐てん雪の雪降す人命と思ふまもなし

吉野山 高野山 熱火

寒くすかり雪の雪てんとなれ共かくり雄なり伽の浮舟

朝顔の頃一首

さかり咲花色ふも新のかり居をこのハ吉と思ふ

四季常

閑やかく本来と極まる山林と若宮と常と無我と我写

四波羅密

其の夜の夢の林の夏覚て常と楽と我と浮き身を

武蔵 桃原の園賛

桃山の夏ハ伏見の夏なれハさめて二度問道となし

早梅

梅折しまも今朝咲初めし一枝ハ梅の主しと心備てし

吉野の早舟

掛けとり帆彩の吉と見分ぬ磯辺の神の守る早舟

笠木賦

笠の板賦ハ夏ハ立かるかてめものハ我と身なりなり

若水

春永き世にいきながらへて人毎に日々新しけれ

述懐

繁られて古さもしらぬ浮世にぞ住みなれぬ

なかく氏の家は左近の桜とうたて

雲居より移せる花と世かはりて白ふ袖に八天の羽衣

花さかぬ山のとさしてい

花ゆゑに俗の人の角けれハ塵やつむと捨ふ宗の戸

榊井神主信直

世を捨て我ら柴木の戸よりぬるゝ夫ゝ原に梅ゝ月新

早世をいとも

さかり過ぎの花を今盛りなれハ夜ゝの風のいとゝ吹きなき哉

紫霞の文殊を話して

しらぬ世の霞みたかく鳥かけを通き出ふ文殊なる哉

開屋ゝ帰ゝ

生ゝ来て捨ゝ世ゝ迷ゝ故の闇をはるゝ明ゝ名のみ留めて

熊ゝ橋の光ゝ寄ゝて

彩ゝ虹の熊ゝ橋ゝと来ゝる人を道ゝ法ゝの面の仏ゝ寺

仏をゝ人ゝ見

仏とハいかゝなるものと人間て風ゝ掛けたるまゝ柳の糸

花葉の碑

墨染の袖の縁に筆すて、斗量は必さきたる歟

佛

不とけとハ世をむすわれのなれ共ハ我むすわれなくを何ゝ佛けとハ

山海氏大島ゝ川

山海より海を隔る者と我うきと大島をきゝ川を渡

ゆくまゝ

於て世界の数と亭〻雪のかゝらを積る今年のくれかた

毒の中ゝ蓮をうえて

生れかわり死のゝ先ハなるものと問ゝきゝ者ハ蓮なり利

海の中道遠寒の面

雪衣

夏きるを心ゝ得ゝ雪衣の神の屋ゝなみかけの岸

松ゝ中し

君ゝ代ゝ千代ゝ中〻の松すゝ中し松の葉かゝの樒こゝ者

おゝけゝしき寿ゝ給ひし松ゝ中ゝ千代ゝ松ふ生きの松風

小今ゝ山ゝ寄ゝ人ものかゝり寄ゝ

小人家山みゝの八幡宮吐ゝ者れ松を知ゝ中ゝ信ゝ者さゝ

山ちの牡丹

言ゝ行ゝ言ゝ正ゝ仏けむ我ゝ山寺のこゝ者ゝ中ゝ花

[illegible] 怪手なり

[illegible]代の南島のうのうとして[illegible]白波

怪手島のさかひの歌

問ひくまハ縣を分て怪手島のほとりかゞる一節の歌

河内なりする意

高[illegible]心のなしやなるかくこゝ春他と常に高[illegible]

達磨の哲人

片岡うまうと言の葉なるはゝ我[illegible]ぬ[illegible]

おとなひ[illegible]高[illegible]文[illegible]高[illegible]道ハ序受の後と華の葉の舟

佛本道

雪の山[illegible]むさし佛の光り八今[illegible]ものと

大[illegible]橋[illegible]

吹風[illegible]れ[illegible]蛍火ハ大[illegible]橋を[illegible]

[illegible]崎

[illegible]の[illegible]の[illegible]と[illegible]と[illegible]を残す釜船

愛[illegible]山[illegible]

好の[illegible]の[illegible]の[illegible]通[illegible]愛[illegible]の山[illegible]

松浦[illegible]の[illegible]の[illegible]

[illegible]お捨て[illegible]石[illegible]研[illegible]松浦[illegible]

自[illegible]

我さすらへる葉の竹へハさらぬ雲の風に住て

篠の花の白浪

流れりハまもとも濁るとも篠の花と露ハさらぬ

蓮の花

汚すとも濁れる蓮の花ハ汚れ迷水の中に咲候

菅

菅無之候ハ菅ハ菅なりて名々人数菅と菅とにて

五月雨に故人に寄せて

五月雨の菅の雲の雲のまつれと未まさぬ君を未まさかと思ふ

淡星

世の中に菅も人と生ける菅ハ淡星無みなれ見世

淡海に出撫淡海

菅笠のすもかのやとにまさよ月さすとて淡海に秋

初鰹

鰹の名と名所尽し宮居山の雨の前掛めを初鰹かな

土山の魔の茶

土山の名と茶さい茶鰹水擇ハめや子代の杉原

梅田雲居

我れ作く出雲稲ハなのあら下氏を養ふ人母の神

[illegible]風を[illegible]神[illegible]多我れハ[illegible]

雨信

[illegible]ハ稲田の姫のこかれたてる[illegible]

はるをまつとて

秋されて米の山端よりもる雲ハ霜の[illegible]一[illegible]立り細なり

夜半の月

[illegible]の夜[illegible]鐘[illegible]覚て[illegible]数[illegible]るハッセッ六ッ

松風日暮さめて

さよ[illegible]米の[illegible]打松風ハ[illegible]すとて[illegible]愛[illegible]

松[illegible]南[illegible]紙[illegible]

西東分て力[illegible]さまる御代より遠国の関

[illegible]家の[illegible]板[illegible]

[illegible]

我[illegible]を[illegible]

[illegible]代[illegible]寺の[illegible]又関[illegible]志[illegible]

[illegible]の月

月さて四方[illegible]

[illegible]

[illegible]八[illegible]

水中月

時雨今日降る川なるなかにうれしきをおうれぬ世なれば

紅葉の雲

永久世を繋ぐ世に無かりけり天の雲の

陸の中道

いにしへ唐にかよひし山陸の中道をのしるべ

笠崎や千代の松原幾代を常盤の色も残り

残雪

吉野山雪ぞ降りこそのこる春八風の使りと春ぞ

新花

なげかしはさかりの花の影ぬをちらんとそ惜しめる心のと

秋月 秋南天

たちをとつかへ春を二川なき心はしの秋の夜の月

四大色身

世の中こなを我身と形ぶ風の動きを火と水と土

和歌玉章を引て

法の山ゆきこそ今形の色帯宮殿の塵の梯山ゆ

春山の坊端無を出て法

春の山やまひこ高き常八谷のつこと友やとつ

心ろすくなるものは花さかり　木のもと毎さこゝろ慰し志

能

かゝやかす世を拾屋はゝ長沢きやよ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

なし　ゝ　ゝ　ゝ

心佛座とは（ゝ）輪をぬけ出る是は我身のなし城なり

秋月山

四方山の五葉の松巻さめ拾ひて来る秋の夜の月

月

月ゝ八世を捨てかゝやん高ゝぬ秋八山氣の庵

唐の宮

秋ゝ唐の花は菊ゝ明宮八宮き世のまを　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

宗祇ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

老ひたる若ゝ共ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

僧墨ゝ社

三ゝ年ゝ二度さける花の色を今の世ゝ聞人さ　ゝ

花を見る

ほゝ夕ゝ花の色ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

左近の桜

宮ゝの御ゝの花の天ゝ下　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

春岸

[illegible] さかりの花の字りろ人い常なる道を示す花

さを姫

さを姫ハ糸の柳の緑垂て池の面を掃けり哉

幻住庵の桜

庵の花

我庵を花や咲ぬと世の中の人さかるなる哉

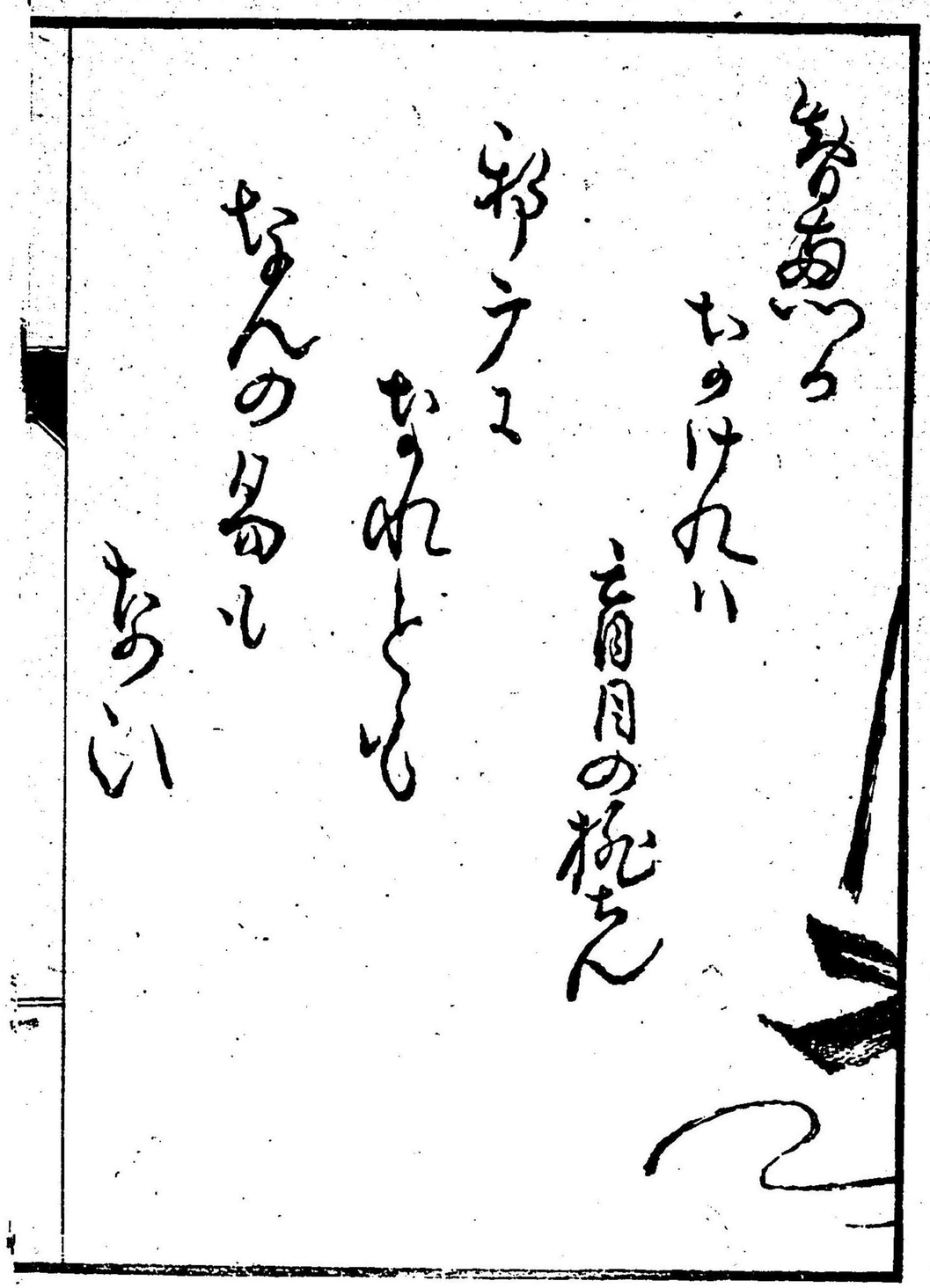
山茶花

嘆花を茅のことくと示す南瓜の保多仲なれ

山ゝの花

[illegible] 山寺をやまひしの花

うま
仙厓
書あり
清之丞
笑へ
て


春爲つる
おのけれハ
春日の松ち
郭テ
おのれとも
なんの為ぞ
ちい

逝しの

逝しのハかりの如くに流れる春の阿阿川の底ハ見

山和尚

手束橋 浦嶋の子の玉くしげ かゝしてこそあきは来ぬ

産州

秋ハけを産のる州繁雲出林時 音を伊んとはらふ

大こ長橋の巻

山寺風雪 秋ハけちる巻尺ハ大こ長の橋と論て和尚

雷斧石をけて

曝れ世けを産の山寺、斧の山ハ月の

かゝ〳〵さかんむ

題目志

秋恋人みやこ寺壁のふる歌の夜の月

春

春風やいとゆふばえ梅の花ちるもの[illegible]

花近梅

九重の春かすみ[illegible]花ゆへ[illegible]

梅花皆白宇都宮寺雪の中の上より白梅咲り

西行庵生去出ふる雪

恋

ふる君ハ西の白雲寺れと賤う[illegible]

雪中鳥

雪ふれ[illegible]ふるかと寺鶯の中よりとの色まさるかな

月さしめ

いつさう[illegible]友社と[illegible]や[illegible]月日を[illegible]

梅咲[illegible]より[illegible]舟[illegible]実[illegible]

千松島山と[illegible]と[illegible]梅[illegible]

花ちる

[illegible]時[illegible]ハ[illegible]

山岩国の梅

[illegible]

山寺の[illegible]梅

糸桜かなそかつらもとにあるあれは
花のある寺

又

文はそ花ふる寺の木のもとは拂へハ影も苔けるなりて
古八幡宮社し意

雨の朝

時ひなる雨や花のさかりの角風いかゝ色よをなさ
古寺夏の花

寺宮本土風八宮かつて宮ゝ宮ゝ宮ゝ宮ゝ花の角寺

桜花

桜さく嵐の山ゝ三寺のもつめそ入れハ春のこゝ

石清

大ひなる新ほ四月の新かぬハ山ゝ高ゝ石の形代ら

夏世

生ハ来てかゝを夏き世と厭ふと厭心世夏きせ
ふり世れ

東ゝ水ヲ西光寺清

結ひ玉契りの糸の永ゝけれハ引ゝ来ハ不ゝけ世ゝ

金沼仏なゝ為送りて

名ひ逢て金ゝ金沼ゝ金ゝ仏を植ハ八代ゝ為ゝ

部ゝ

布ゝ二ヲ枕ゝ部ゝ書ゝ名十ゝ書のけて さむれハ

去真

嵐吹き雲ぬ掛を号すのむせもぬみ吉野山と花見

月

さ夜ふて月見る為の友とかな語んとなれば己のう影う等

月見まま意

来といぬと月と我との面白浦浪れ雲の寄こ寄るめ

空さ世

世の中と憂きと思ふ我仕なれ我う思ひ程空きものなり

世の中を今更いかゝ厭ふん厭ふ世なくハ生れすもの

阿

阿弥陀仏と何ふ弁の地獄尋てみよ何のかゝりハたよ

住吉

神心ろ世ま住吉と思ひ人ハ住吉ま住吉と思ひてゝなり

道一

弥生収て憂き世を守る神なれハ唯住吉と能い

那河川水る

よや世の中ハ水ま流れの下た憂かゝ波の寄ちなな

花さかり

花さかり今ハ心の戸ま閉ん人と分りと号のなり

散る花

咲ぬれハまゝ散る花を又る人の身の移ふを待ふ見るこむ

嘱

いかなれハ人や秋を捨しらん嘱するの時ならねと

行基

待てと云ふ待ぬ恨ハ思へとも哀ハ花を見飽ぬ我なるかな

在原業平

皇の御りゝ咲けるを稀ゝ此ゝ見るとハ思ふ所ぬる

孫香の烟りと糸とをとすんとを思ふて

孫の糸の意ち烟を糸とをとて とまれる色の我と成きむ

懐奥の影

行とれ春ゝ春と云ん朝影の夕を尊ふ思ふ咲きの花

千ヶ寺まいり　おろおぬし

千寺参て法華問学ふ本来擇んて唱ふ題

六祖大師

想ふり笑を着山かりの糧摩ふ千ヶ所

義人

夜をへし我ふ玉日庵の孫ふ尋ふ我ふ人ハ志ふ糸

逐懐

必ふ人ふ見ハ春ハ恨ぬや我ふ師ハ多影なふ師

藐世

世の人のうち世の中を我ハうとしと我を見る世とハ誰か見るもの
天ぬを空しみ
只仰け世ハ空の鶴なりけりやハ皆天ハ我
大賀の花
常毎に花のみ庭の花をうえて飽きせぬ我を花ハ飽かむ
あ月ぬけを梅ぬ心ぬ仰ぬけ鶴の鶴こゝなさるん
心
佛とハ花ぬるぬ如さ夜ぬて日ぬ蓮花ぬ三日の月かな
一色一香を仏中道
以花色ぬ色ぬ三千かゝを空ぬハさもなきまのれ

菖蒲
あんこ山摩河あんこ菖蒲ぬ天ぬ宮より古ぬ寺の庭
〃
時雨花ハ今日翁今宵ハ時雨散る春もやかて紅葉
市ぬ隠
遠山ぬ市ぬ山ぬ我ぬ庵ハ世ぬ塵ぬの大いなる海
神人なぬの秋
秋ぬ月ハ世ぬ中ぬ海ぬ神ぬ澄ぬ月ぬ
田子
春中ぬ夜ハ竹切り秋ぬ収む里のつとめハ時なの歩や

松三流詩門流より陶

父母のいまさハきとく遊ましな老いの後ろの文字をなて

姫中村

野辺咲ちる桜かなかしこ咲りの花姫とゆけと我ハ行方

第時ま詩を

初春秋初のめくみハ第時のる代の松系宮尼とく仏

仏

いつのちもむ生れ初しき春のそなけなきあいと巨れ

宇稔

霞と泣千竹の色も秋佳て身ま焼よ初風の春

自述

生ちを死ぬる姫と我作ハ主仏姫ちる身の降ちしやハ

美耶

我ち屋ハ蕨ちす演の宿まみ美郷の宿ちる解宿ち持思へ

宣郎公

短ち夜ハ宿さめなれハ部を我ニ世けとて宣やいまし

早朱を姫はくを送

一と粒ち米ち寄さハ第まの山田ちの力ちをあしらくて

初秋

井のもとの桐と風となりや我ち庭の面ま秋ハ季しや

雲上出郭の面

之宮の天満宮より社前れハ雪の上にて吟ずし

なるべしの化石

来歴を問ふ所のかさ石の石となる事相違さ

山本小島の綱なり

危きをあり高ふ世の中お志あ其小島つなぎ

岩蔵校生人今

岩崎や鶴ノ鶴生る海人たち蓑を被りて神心かな

蛍

生れなかの所ある光りハ何るものと問ふ所ハ蛍なり

今

今日ハ何時ハなき身と老行を若き同し命なり利

糸桜

枝垂れてき、ハなくさちるを見まりもの花の寿

樹の雪

樹の枝の花と何さむく白雪のとけての雪と歌むく

雪ふると矣

咲る花と云ハ何くかを夜半の嵐を盗まれなり

岩花

散る花ハ何すなき身の慨かやかけて留めたりさかの糸

在近の梅

玉泉の近くまいて梅花見しに行くハさめまものを

郭公

郭公鳴うなやいろこ入入今の陸と夜ぬけ行けるなり

五月

郭公あるる我ら玉の尾を今ハ又いさ隠るるなしの系

月笑書付

春くれ聖ら玉はし色の行くハ外より移るかけハかるとし

雅夜

蛍ゆくと夜ハ明くと夜の郭公枝きけと布堪す蛍

つゝ咲き也

咲も咲かつゝ咲きセと咲ハ夜て咲き秋を咲ら

かむり秋田玉早早村と名付

千早振神代のはを田作りて武ハ中さ〻中ハ〻ハ寿里

蓮天寺花見

去風と天ハ〻〻ハ降の春ると蓮て佛と花ち合

山寺の牡丹

伊見寺深ら春を春をてゝ春と書入なむ春深ら咲け

ほゝき松ハ花風を屋ま

見ハ山のかゝ雪山ま桜ハ春ハ春ハ山ま桜ハ春ハ春

かゝとまり宮の浦

行舟のよそに掛しるかゝとまりとまりとまれ神ハ宮の浦風

れ高よ人高の碑を

浦風の憂き世をとゝ法舟人ハ只思なく神ハ彼の岸

通天橋の紅葉を見わたす

天橋立かよ海橋紅風のおとゝ紅葉時きへる羽衣の袖

学を吟て

説くとも聞くるもなき秋の法を花の手かけて学の影

桜咲木の本にて

惜かゝや一夜借り宿の木の本は散るまでも見ぬ桜花哉

東都郭公

郭公東に鳴きし我が身を西の都に来鳴

栄の花

宮花のとの枝ゆいこそ栄の山野文烟り立如ハ

吉野より出る東陸の石合浦也舟ゴロ迎

我の宮我は玉なる玉拾風の使りよ合心の浦松

花と高とき菊さんお望すれて

扨や断一如我が法華の花と高さふ仏なりて門世言む

宮島山

烟り立かすみの山の猟猫ハ鳴ハ仮の宿の賜る風

宝の言

我ら唱ふ新林の春と寄きまくまはちろ輪治八ぬと林

花とつんと

朝ゆふ空はろふ花の色を見る我ら移ふと花やもも

秋風

鶯八人の四方竹ひ竹と竹本の色のふるる移ふ

夫の雪

梅のうへちりはしはの白雪八けるもけなり春さもなる

背根山の雪

風ふしみ背根の山も雪八ちぬひとやあ彩きるれ

平產自以本橋重富孟試賞

白雨霸詰條遷

聖朝

武城宮闕

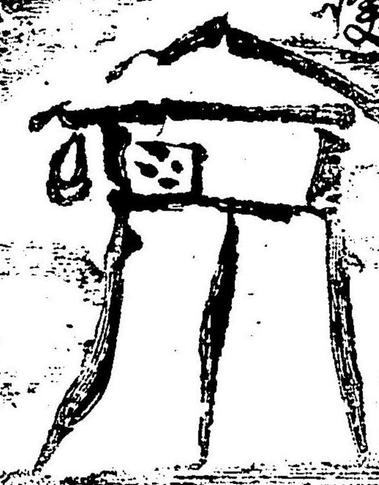
聳峻峭

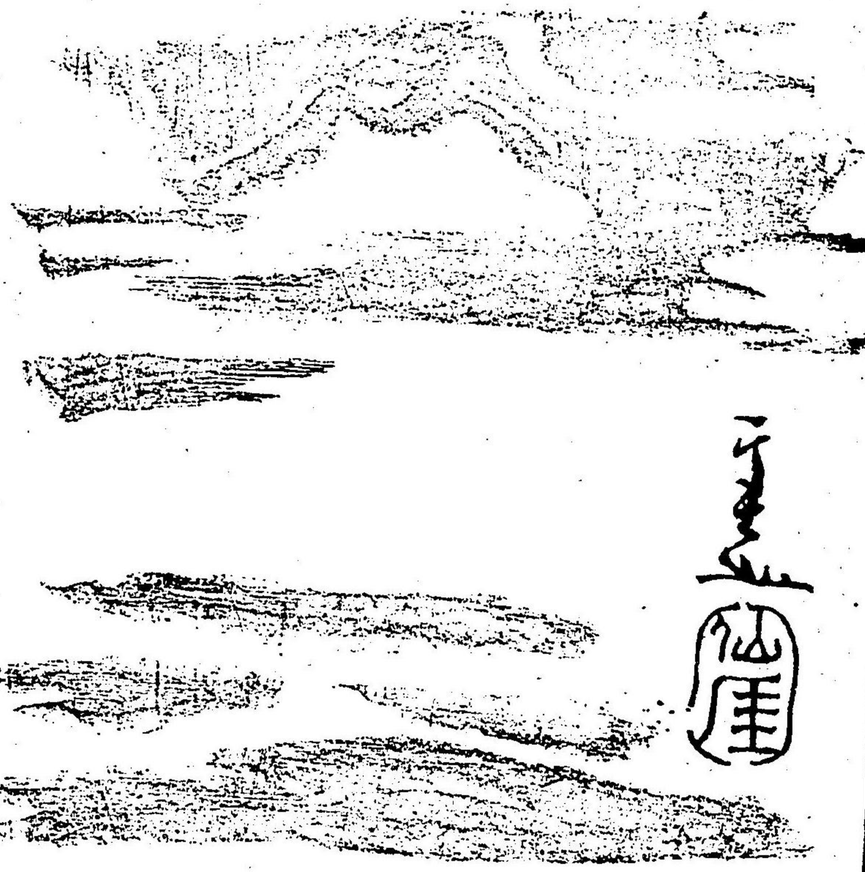
春開芳苑

るつ外

蜀無西望

日本橋





[illegible]の[illegible]の[illegible]

田子の浦に帆かけて走る舟留めて[illegible]の雪[illegible]

宋山

かすの戸かおかいとなる宋の山朝夕烟り立ち始めハなし

[illegible]

言の葉に表わしがたき低けん実くやる[illegible]の保ゑみ仲花

[illegible]

南無阿弥陀仏の四字の御[illegible]流れて[illegible]

山路者の[illegible]を農する[illegible]を同[illegible]

[illegible]

時雨

鈴ふる時雨てからう時雨りて空あけき世のためしなるらむ

真人賛

[illegible]心はくまなきて神のみけとなるみかけの岸

むら

誠のあの仏と捧げ玉なれや妙なる法の蓮を愛の雲

雲

稲妻八重垣姫稲田姫田子の杉のある父母の神

さなわり

おさのわらまの見沼なれや野辺の神まてよきはる

千束川

時々なるる川と八重なれと叶て積れハ千束なりけり

風升

呉竹八絵する人とさてはて花何まり作り一本の風

はさ歌

咲ぬ花とも咲ぬ一世 朝顔の心の苔むさるれつる

毒目民八毒蛇を殺して

中ゆをなる白波立ハ川の流れ今日の知りこはり

近作 はるかの石井の心を

蓮の栄今新玉歳の白ハけく後の新るこれ

祈晴

雨降る出雲の神八百万きき稲田の姫に号くまれとハ

みつ雲ゐを出て

みつくの山や夜高ゆ月くまと心ゆ出雲の日ふれ

出雲の人を送りて

志風吹けハ桜も花ぬさ手向ゆ海の俤ゆ雲とたなび

我宿は出雲遠西四百里仲秋間紫氣

出雲宮あるの山後思ふ雲は某の戸和名秋の月新

月を省て

岩ゑ出て世を厚て俤の世と思ふ山ゆ思ふ山ゆ

雲と氣

いなつまの時の時ゆ雲かゆ稲ふ稲ゆ稲ゆ稲ゆ

人の心を忘れむと方ゆて

朝夕ゆ雲ゆ雲ゆ雲ゆ雲ゆ雲ゆ雲ゆ雲ゆ雲ゆ

寿老人歌

子ゆ孫ゆ雲ゆ神代ゆ雲ゆ我ゆ雲ゆ

山居

岩ゆの苔の袴の雲ゆ雲ハ雲ゆ雲ゆ雲ゆ雲ゆ

寿氏金沼沼を雲ゆ雲ゆ

名月遠三金壹屋俤ハ雲ゆ雲ゆ雲ゆ雲ゆ

志賀の神楽

あなうの磯辺の神の新しい神楽志賀の神楽の果てしなければ

白雨

水海の面まで天の白雨の其神に祈くまじさ

天の糸

花子

春雨にかすりてい来ハ志賀の山けの雨りの道ハ

け備手り

立選不安の岐の雪を夜を待ち時くれたるも

あかつき枝を留まる白雨ハ我が身佛の蓮を苔の古屋

送湖東行

過て八割れ割れて八方ち相坂の関ハとかめを置の通ひ路

錦織寺より近き寺ゑうり

近江方面の別れや佳き姫の海湖成り花の古寺

立ち出えい

柱弓矢対月のとしまて今を立初ち春ハ春かな

春を春を春とを立よ春を

春の春春の山ち春ちけれハかすとの紅り寺も咲つ春ち

和歌浦楽

世の中を何を嘆ん我が我が捨かにて我れ世捨楽

乃感

折りまむ春のたよりも世の中の人の心とさくらと共に

行住春のけしきの梅

さけばちるちれば梅の春なれや幻一夜の花の面影の

さかりの糸よ挑る花

さくまで散りぬる春や惜むべき挑げて留めうるさかりの糸

山吹の花

春げ、挑び挑べ春げ春は宝ち花の作りて

百花光

ひかれ春き芽の中川を惜むべき我が花をこそ手ぶりのこと

春待の曲梅間の春の鶯

古梅の春を所に咲き梅の間の身をかなしむ

当の春の梅の間の身をかなしむ

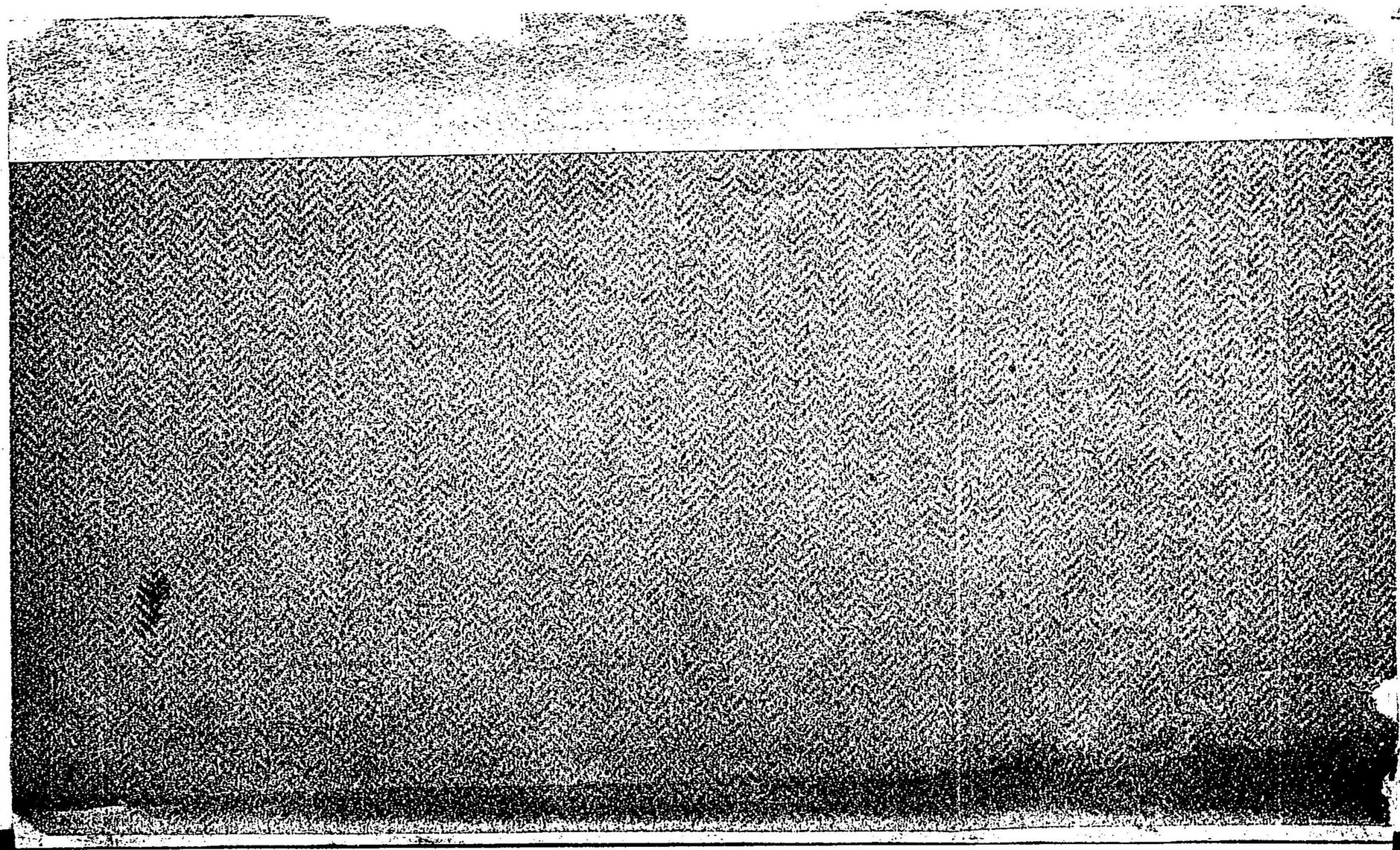
中村盥雨所秘藏之名葉小舟一軸
者吾先師仙崖和尚之自詠自葉
也然而非學和歌者惟出從博達
宏通者也和歌者流之融哉不
可謝議矣往々詞鄙而渋者有之
至于其立意遠大者和歌者流亦
每々讃美之所謂曰道歌者也焉

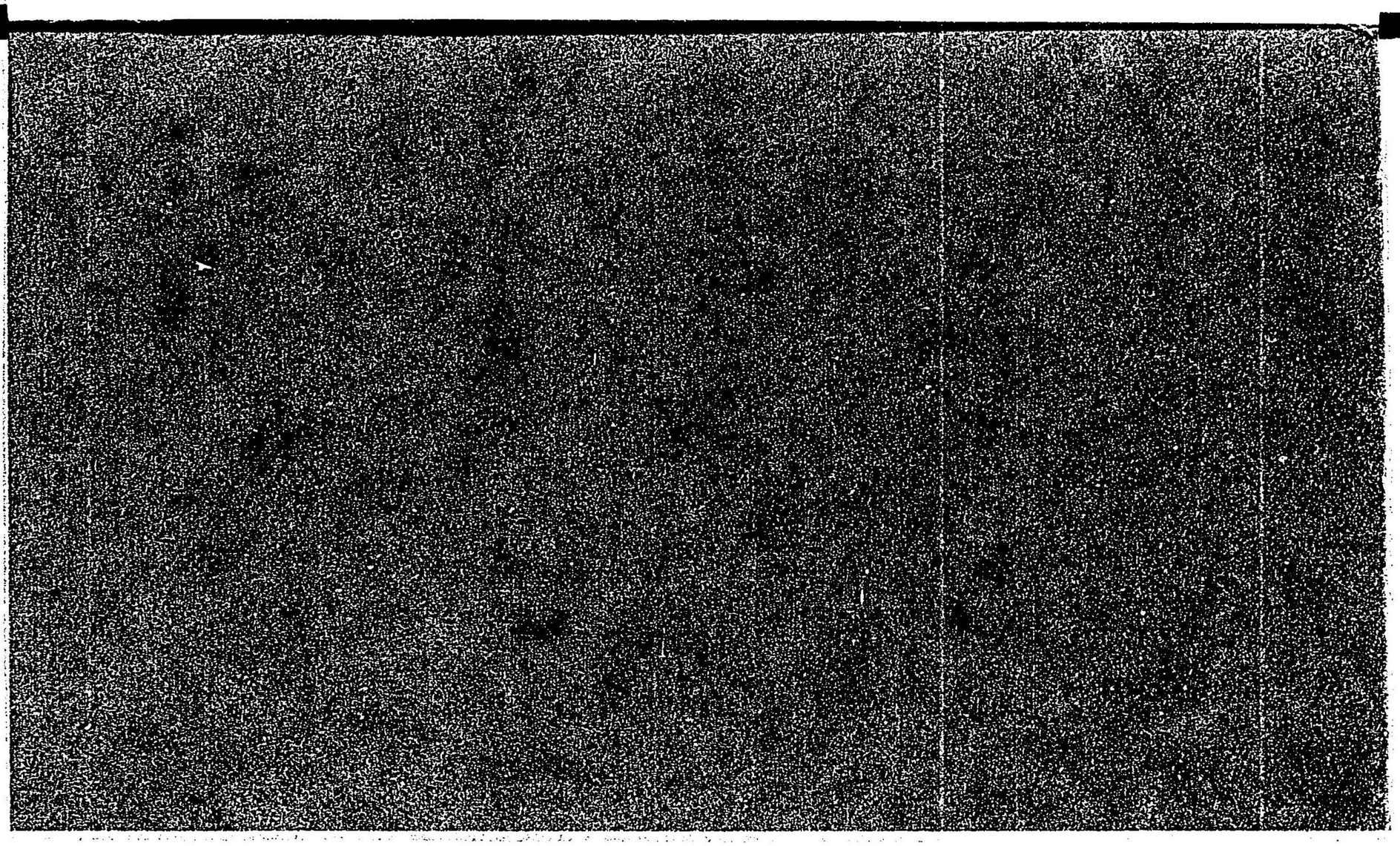
與年德共邵道業併熟則吉人
推尊之以敬弥敬矣而今攜此一軸
來請其序於予予弟子湛元加冠鄙辭
於其首云爾
初置之首後移之尾
嘉永六庚戌仲夏再書

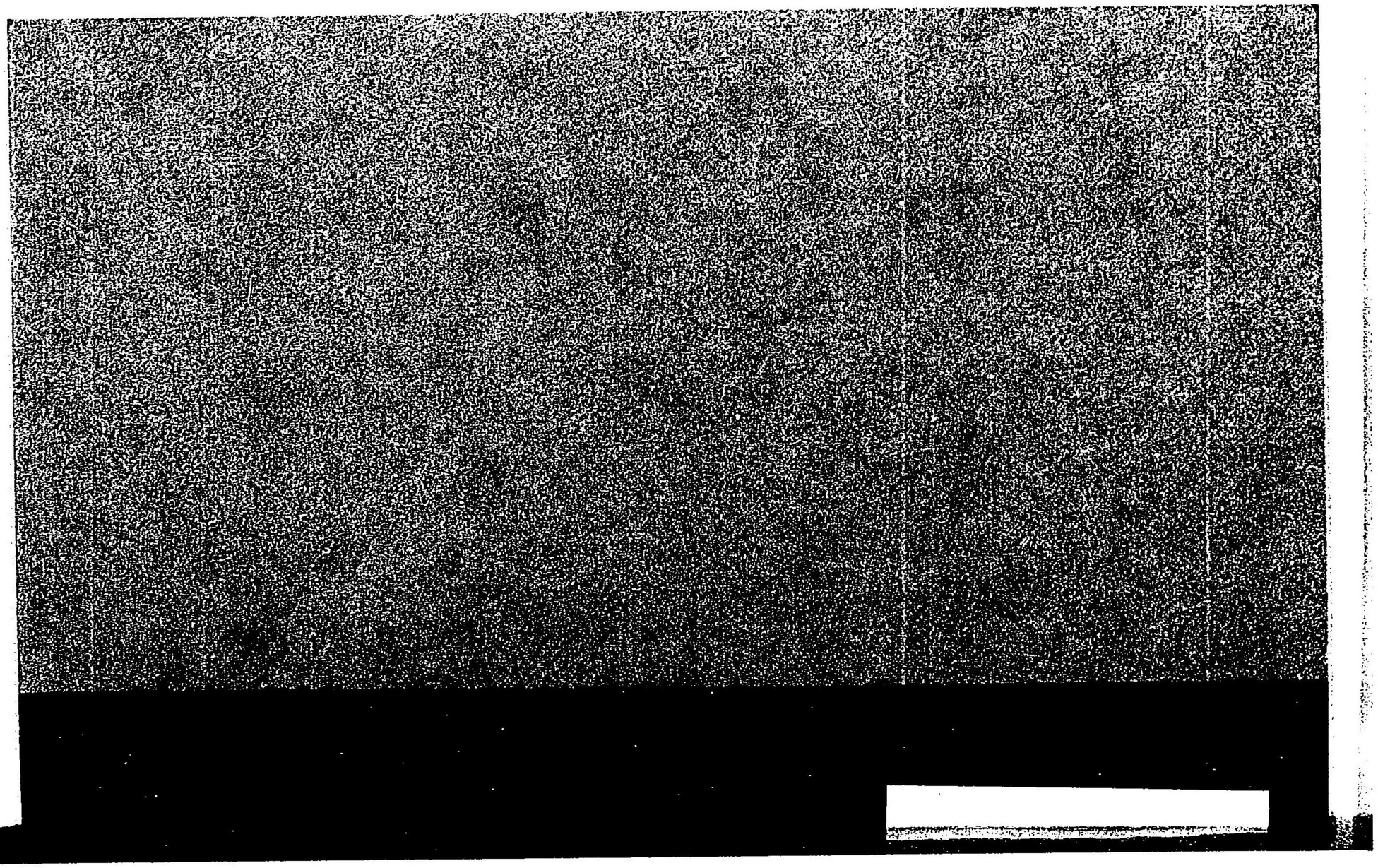
聖福寺所藏

明治三年十二月廿五日版
故人
著作者　普門圓通禪師
福岡縣平民
發行兼出版人　龍淵東瀛
筑前國福岡市御供所町拾九番地聖福寺住職

非賣品







特55
316

仙崖和尚捨小舟

国立国会図書館

086176-000-7

特55-316

捨小舟

円通/著

M23

DBD-0913